
とある第六位の青髪ピアス

助けてください

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある第六位の青髪ピアス

【Nコード】

N7916V

【作者名】

助けてください

【あらすじ】

いまだかつて学園都市の第六位は謎のままであった。だが、追われている一人の少女はその姿を目にする。全てを超越する真のレベル5を、この目で、

学園都市第6位（前書き）

青髪ピアス第六位説を小説化しました！

よかつたら感想・評価どんどんお待ちしてまーす！

学園都市第6位

「ハア、ハア・・・」

少女は後ろを見た。

少女の視界の端に、黒いスーツを着た集団が少女を追う。

「まだ・・・追って来てるっ！」

再び、少女は足を速めた

「んあゝ、今日も小萌センセイの愛の説教で遅くなりよったわゝ」

エセ関西弁を使いながら空に向かってノビをする青髪ピアス。

学園都市の空は、オレンジ色に染まっている。もうそろそろで、日没しそつだ。

「はあゝ・・・カミちゃんには謎の銀髪イソーロースターさんがいるし、土御門にや妹系メイドがおるし・・・『オンナノコ』に恵まれないのはこれでボクだけやなゝ」

そんな未来も希望もないような言葉をブツブツと呟きながら、青髪は適当に空を眺める

そして、もう一度、深くため息をついたとき、

青髪ピアスの脇腹に、何者かが激突した

「うおおおっ!？」

180cmオーバーの体が、不意の攻撃で横に倒れる。

「な、なんや!？」

青髪ピアスは自分の状況を確認するため、前を見た。

するとそこには、紺色の髪が背中あたりまで伸びている小柄なおっとり顔の少女が同じく尻餅をついていた

（うおっ、お、オンナノコや!？）

青髪は呼吸が止まりそうになる。

だが、驚くのはそれまでだった。いつものように、『オンナノコ』を見る目ではない……

明らかに、様子がおかしいのだ。

傷だらけの顔、はだけた衣服。本人も息をきらし、その場で下の方を向きながらこちらの方を向く余裕すら無さそうだ。

「だ、大丈夫かいな!？」

青髪ピアスは慌てて少女の方へ駆け寄った。

少女も声を掛けられ、ゆっくりと顔を青髪の方へ向ける。

衣服はまだしも、このぐらいの傷なら病院に連れていけばなんとなかる。

「直ぐそこに病院があるんや、一緒に行こうや」

そう言って青髪は近くに建っている病院を指さした。そして、立ち上がり、少女に手を差し伸べて立ち上がるよう示唆するが、

「た、助けて……ください」

「へ？」

青髪ピアスは目が点になる。

「お願い……助けて……」

直後、人気の無い路地に、黒いスーツを着た集団が角から現れた。その中の一人が青髪の横にいる少女を指さして何かを叫ぶと、一斉に黒いスーツの集団はこちらへ向かってくる。

訳が分からなかった。

でも、青髪ピアスのやる事は一つしかなさそうだ・・・

「こっ、こつちゃー!」

理由を聞く前に、地面に座り込んでいる少女の手を強引に引つ張り、裏路地へと逃げていく。

行き先もなく、ただ適当に道を進む。

そして、辺りの隠れるに最適な車を見つけ、車の陰に隠れ、青髪ピアスは少女の口を手で塞いだ。

少女はゆっくりと青髪の顔を見る。

横顔だけだが、もうあのぶつかった時の、あの頼りなさそうな顔はどこにも無かった。

だが、直後、

少女と青髪ピアスの隠れている車に謎の攻撃が突き刺さり、爆発はしないまま粉々になって辺に吹き飛ばされた

「くっ!」

「さあ、見つけましたよ。アリサお嬢さん」

「へ？お嬢さん・・・？」

青髪ピアスは、敵の声にもかかわらず、少女の顔をのぞき込む。

少女は申し訳なさそうに下を向いたまま黙っている。

やがて黒スーツを着た一人の男が、

「そうだ。そこにいる少女こそが、我々『黒い太陽』という組織のボス、アリスお嬢さん。」

普通の人間なら、組織に戻るよう少女を説得させるが、青髪ピアスの行動は違った。

「じゃあ、そこのお嬢さんが仮にもお前らのボスだったとしても、なんでこんな扱いをしゃがる」

いつの間にか、青髪ピアスから大阪弁が無くなっていた。

「我々は裏切りは許さないんでね、例えばボスだろうとそれ相応の処置は取る」

そう言って、戦闘の男は懷の中を漁り始めた。

そして、拳銃を取り出し、アリスと呼ばれる少女へ向けた。

「!!」

「『死という処置でな』」

次の瞬間、轟音が炸裂した。

まるで威嚇射撃のように、その銃弾は少女の横の壁に突き刺さる。

少女は、足がすくんで完璧に動けない

「これが、最後だ。アリスお嬢さん、我々の所に戻って殺されるか、ここで殺されるか」

そのとき、青髪ピアスが再び少女と逃げようとしたが、立ち上がる前に青髪ピアスの背中を蹴り付ける

「が、がああああああああああああああああああ
ああああッ！！」

青髪ピアスの口から、地面に鮮血が滴る。

「青髪さん!!」

少女は青髪元へ駆け寄ろうとしたが、青髪ピアスは手を前に出し、少女を止める

「行け……俺に……構わず、行け！」

「でも！」

「そうはさせない。アリスお嬢さん、逃げる前に仕留めるぞ！」

次の瞬間、一人の男がアリスと呼ばれる少女に銃口を向けた。まさに、絶体絶命とはこの事である。

青髪ピアスには、この少女を助ける義務なんてない。しかも、今日いきなり会ったばかりで彼女の事は何一つ知らない。

だが、

（あーもう、くそくそくそくそ！！なんでいつもこうなっちまうんだオレの人生！？）

頭をガシガシと搔く青髪ピアス。けど、その行動は『覚悟』の現れだったのだ。

直後、容赦なく拳銃は爆音と同時に火を吹いた。

一直線に少女へ向かう銃弾。けど、その銃弾が少女に当たる事は一生無いだろう・・・

「て、テメエは、青髪！？」

「戦闘はつくづく勉強させられる。例えば、こういうのが『堪忍袋の尾がキレた』っていう風になあ」

青髪の言葉に、拳銃を一人一つずつ持つ集団が引けを取る。

青髪ピアスは銃弾を片手で握っていた。彼の手から、煙が噴出している。

（こ、コイツ、銃弾を片手で取りやがった！？いや、それ以上に、コイツは俺の足元にて、俺が銃弾を発砲した時もコイツはまだ足元にいたハズ・・・ってことは・・・）

男も思わず声に出してしまった。

「こ、コイツ、『銃弾より速い速度で移動した』ってのかよ!？」

男の言葉に、今は目の前で立ちふさがっている青髪ピアスをのぞき込むアリス。

「だから『堪忍がキレた』つつってんだろ。」

そう言っ、青髪は片手の中にある銃弾を思い出し、

「ああ、そうそう。昔、お袋に『その人の物はその人に返せ』って誰でも教わるような事習わなかったか？」

青髪ピアスは盛大にニヤケと笑みを含み、

「ホラ、これ。お前らの物だから返してやるよ」

そう言っ、手にある銃弾を集団に向かって下から軽く投げた。

普通なら放物線を描いて落下するのだが、青髪の投げた銃弾は違った。投げた瞬間、銃弾は爆発的な爆音と破壊力を生み出し、後ろに尾を引きながらレーザー光線のように集団を中心に爆発させたのだ。

「ぐ、あああああああああああああああ!?!な、なんだ、その力はアアア!？」

「ハア・・・今更だが、もう一度『この力』を使う日が来るとはなあ・・・」

そう言つて、青髪は倒れている男を見据えた。

次の瞬間、男の腹部を、一瞬で目の前に移動した青髪ピアスが足を振り下ろす。

それだけじゃない。爆発的な威力を増した足が、男の脇腹に激突し、その地面がクモの巣のように割れる。

「が、ハッ」

男の口から、血が漏れ出した。

「何とでも言つてくれていいぜ。俺は『こんな力』を持っている以上自分のことは悪魔だと思つているし、最低の人間だとも思つてる。でもなあ、そんなクズの俺でも気に食わねえ事が一つある」

直後、青髪ピアスは声を発した。

それは誰の声よりも重い言葉だった。

「少し裏切られたぐらいで集団で一斉に拳銃を突き付ける程、

おめえらは俺以上のクズだったってのかよ」

それだけ言つておきながら、青髪ピアスは男を踏むのを止め、集

団に背を向けて歩いていった。

せつかく女の子と巡り合えたのに、そんなチャンスを自らフイに
してしまった。

そんな青髪ピアスに、アリスは安心しきった顔で話しかけてきて
くれた

「良かった。本当に良かった・・・」

「怖くねーのかよ？」

「ううん。自分を助けてくれた命の恩人にそんな態度を取ったら失
礼だもん」

「そうか・・・それなら良かった」

そう言つて、青髪ピアスは女の子に背を向けて歩きだしてしまっ
た。

「ま、待って！」

青髪ピアスの肩がビクリと震える。

振り返った時には、アリスが困っている顔をしていた。大体、予
想はついた青髪ピアスは、フツと含み笑いを見せ、

「俺の家に来るか？」

「えっ!？」

「どうせ、戻ったところで帰る家がねえんだろ？なら、俺の下宿先に来ていいぞ」

「え、あ・・・あ、ありがとう」

精一杯に格好付けた青髪ピアスがすっかり忘れていたばかりに「あ」と間抜けな声を出してしまう

「俺の宿に来るんだったら、自己紹介がまだだったな。俺は青髪ピアス。学園都市のごく一般的な学校に所属する、超能力者^{レベル5}の第6位の青髪ピアスだ。」

最悪の日

青髪ピアスと同棲して、早1週間が経つ。

青髪ピアスの性格からして、アリスは家事に専念せざるを得ないだろう・・・

「ん・・・」

アリスは重たそうにまぶたを開け、すっかり明るくなってる部屋を見渡し、手元にある電波時計を見る。

現在時刻午前8時20分。

ちなみに、アリスの起床時間は午前6時30分。

「うあああっ！？寝坊したっ！」

直ぐに青髪ピアスから買ってもらったベッドから飛び出し、急いで服に着替える。そして、ある事に気がついた。

（そういや、私あおの家で下宿してるんだった・・・前は6時30分に起きて英才教育がどうのこうのってあったけど、今は何もないや）

途端に恥ずかしくなり、アリスは顔を真っ赤にする。

そして、不意に、青髪ピアスのベッドの方を見た。そこには、月曜日にもかかわらず、青髪ピアスが寝ているではないか。

「ちよつ、あ、ああ！！まだ寝てるの！？」

アリスの慌てた声に呼応して、悪い夢でも見ていたかのように思いつきベッドから起き上がる

「うわああ！？ど、どないしたん、アリスちゃん！？」

「ああ、今日学校は？」

『学校』というワードを聞いた青髪は急に冷めた表情をして、

「ああ、学校はあるよ」

「な、なんで学校に行かないの？」

「行かないんじゃない、行きたくないんや」

学校が誰よりも好きな青髪ピアスがだ。

そして再び青髪ピアスはベッドの中へ潜り込んでいった。

（ああ、この一週間あれだけ楽しそうに学校に行ってたのに・・・）

このままでは重い空気に潰されそうになったので、アリスは話題を変えた。

「まあ、学生の頃は行きたくない日の一つや二つあるからね！」

それを聞いて機嫌を取り戻した青髪ピアスがニコッと笑って、

「うん！まあ、今度からはサボってもアリスちゃんがおるから寂しくはないんやけどね」

「っ、煩惱有り過ぎ」

今にでも飛びかかりそうな青髪ピアスを頭部へのチョップで制圧する。

「さて、私は今日の晩ご飯の調達に行ってくるから、留守番よろしくね」

「おう」

アリスは仕度を終え、玄関を出ていった。

青髪ピアスはそれを確認すると、妙に陰しい顔つきになり、ベッドに再び潜り込む。

「今日は、世界で一番『最悪な日』や………」

こっ、小さく呟いていた。

「今日は皆さんの大好きな『能力測定』の日なのですよー」

身長135cmというミニ教師は教壇に立ってそう話すと、クラ
スは「えー」という声でざわめきたつ

それには参加していない上条は机に座りながら、

「今日は青髪がないからみんな言いたい放題だな」

すると、隣にいる金髪にサングラスの筋肉質の男は

「そうだにやー、あんだだけ学校&小萌センセイ好きな奴がこの日だ
けは来てないんだにやー」

二人の小声にならないささやきを聞いた小萌先生は青髪ピアスの
席を深刻そうに眺めて、

「今日も、青髪ちゃんは来てないのですか・・・」

物語は激化へ

能力測定を終えて、1日が経った。

この日は、いつもの様に青髪ピアスは何事も無かったかのように登校してきた。

「カミや〜ん！今日の小萌センセイの服はピンクのワンピースやで！」

「あ、青髪！？つつか、いちいち先生の服装報告すんなーっ！」

そこには、いつもの青髪ピアスが映っていた。昨日の事には、一切触れず、まるで何事も無かったかのように青髪ピアスは振る舞った。

すると、その教室に、身長135cmのおなじみの先生が入ってくる

「あーっ！青髪ちゃん、昨日はどうしちゃったんですか！？携帯の電源も切ってるし！」

「あー悪いなー小萌センセイ。昨日はちょっと用事があったんで電源きってましたわ」

「と・に・か・く！！後で先生の所へ来てください！」

「お、また今日ですかい！ボクはなんぼでもセンセイの所へ行ってきますでー！」

そんな青髪の様子に、汗を額に浮かべながら苦笑いを浮かべた。

「もう、ちゃんと聴いてるんですか青髪ちゃん！」

「ボクはいつでも、耳傾けてでも聞いてますよー」

小萌先生と二人っきりで生徒指導室へ来た青髪ピアスは、そう言っていた。

「もう、アナタはテストの点数は良いのに、いつも能力測定の方をさぼっているから、成績不振者会議で名前を挙げられてるのですよー。」

「ハハ・・・テストはいつも頑張っておるから良いんじゃないんですかいー？」

「そういう訳にはいかないんですよー」

ハア、と小萌先生は重いため息をついて、

「もう、そろそろ教えてくれないんじゃないですか？アナタがいつも能力測定を休む理由」

彼らしくない程に真剣な表情をして、しばらくの間黙り込む。

この時、青髪ピスはなんて思っていたのだろう・・・？

そして、こう、声を放った。

「小萌センセイには、関係ないんや」

「そ、そんな・・・」

「ごめんなさいセンセイ。いくら小萌センセイでも、教える事はできひん。」

そう言って、青髪ピスは生徒指導質から姿を消した。

この時、小萌先生は、こう思った。

少しづつ、少しづつだが……、あの青髪ピアスから、笑顔が消えつつある様な気がする。

同時刻、青髪ピアスの居なくなった教室は穏やかな雰囲気になっており、上条も「用事がある」といって下校していた。

そんな中、一人の男が、教室の端で、何かを握る。

（クソ、なんであんな奴らが、先生にちやほやされなきゃなんねーんだよ！？）

男は、額から血管が浮き出そうな程、怒りと憎しみで一杯一杯になっていた。

（あんな無能力者^{レベル}のカス共が、なんであんなに笑ってられる、なんだあんなに騒いでいやがる！！）

そして男は、もう一度強く握り拳を作った。

（俺が、排除してやる。ただへらへらと笑ってるカス共はいらない。）

そして、男は立ち上がった。

下校するためだ。

（今は、強能力者^{レベル4}止まりだが、絶対に超能力者^{レベル5}まで上り詰め、奴らを潰してやる。超能力者^{レベル5}が奴らを潰せば、みんなは理解してくれる。認めてくれるハズだ。）

そう言って、男は手にもっていた物をポケットにしまった。

それは、一見普通のミュージックプレイヤーだった。

だが、問題があるのは、中身の方である。

それは、もう既に無くなったハズである、

レベルアップ
幻想御手、なのだから。

謎の日常

青髪ピアスが通う学校に、数日前から謎の転校生が来ているのは言うまでもない。

名は、神夜恭介かみやきょうすけというらしく、とても明るく、優しい性格で、直ぐにクラスに溶け込んでいった。

おまけに、あの超エリート校常盤台中学に、恋人らしき人間がいるのだとか。

だが、今日の本題はそこではない。

そんな謎の黒髪少年神夜が、上条、土御門、青髪ピアスの3人と異常に仲が良くなり、『デルタフォース』から本当の『デルタフォース』になりかけているのだ。

まあ、別にそんな事はどうでもいい。

青髪自身、それは嬉しい事だし、歓迎すべき事である。

そんな、謎の少年を。

「おう、青髪！」

朝の玄関で、後ろから声を掛けられた。

そこには、先ほども言ったとおり、黒髪の少年神夜恭介である。

「おう、カミヤん。朝は辛いなあ〜」

「相変わらず上条と被ってんな、俺の呼び方」

「まあまあ、仕方ないinchやう？カミって付くし、」

そんな事を適当に話しながら、二人は下駄箱に靴をいれ、上履きに履き替えてから自分のクラスへ向かう。

「なあ、カミヤん。なんでそんなにボクに気を遣うん？」

「えっ！？」

どきつ、と、神夜の肩が大きく揺れた。

「ど、どどどうしてですか？」

「ボクの洞察力をナメんといてや。カミヤんがボクに気を遣っているの是一目で直ぐにわかる」

「……別に、気なんて遣ってないですよ、ボクはただ単に今日も青髪さんが元気だなあと、思っただけですよ」

「ふん、やっぱしモテ男はおっしゃる言葉が違うねん、完敗や」

「ぶっつ、ごほごほ！なんで自分がモテ男になんなきゃいけないんですか！？」

「うるせー、転校一週間で既に5人の女の子に呼ばれ、拳句の果てには常盤台にも恋人がおりとかいうあの伝説は、もう既にこの学校の隅まで知れわたっているんやで！」

「なっ！？なんでそんな事まで知ってますか！？そりゃあ確かに常盤台には知り合いますけど……」

「ホラ出た、この垂らしがあああああ！」

「ぎゃあああ！？なんで垂らしにならんきゃいけないんだあああ！？」

そして、この青髪ピアスの所為により、神夜恭介『垂らし説』が始まったとき、

強襲

学園都市製の普通のミュージックプレイヤーを片耳につけた少年、
御堂^{みどう}は制服のポケットに手をつ込みながら、道を歩いていた。

一見普通の高校生にも見えるが、この少年は一つ、決定的な違いがあった。

外見ではない。

聞いている音楽だ。

それは、消えたハズの物。

^{レベルアップ}
幻想御しだ。

（あとちよつとだ・・・あとちよつとで、俺も『7人の神』へと
上り詰める事が出来る。）

薄汚れた道をゆつくりと歩きながら、御堂は口に笑みを含む。

（大丈夫だ。絶対に成功できる。超能力者レベル5になれば、全員が俺を認めてくれる）

次の瞬間、御堂は見てしまった。

「！！」

その姿を、この目で、

青い髪に身長180オーバーの体をしてピアスをつけた男は、呑気に道を歩いていると、同じ道で、こちらを歩いてくる人間を見た。

その人間は、青髪ピアスと同じ学校に通い、同じ教室を共にする人間。

青髪ピアスはその場で立ち止まってにこやかに微笑みながら、

「よう、『御堂』やないか。こんな所で何してん？」

青髪ピアスがいつもの様子で御堂に話しかける。

対する御堂は少し戸惑った表情で、苦笑いを生み出す。

「こ、こんな所でどうしたんですか？青髪さん」

「どうしたんのは御堂やないか、ここはスキルアウトがうつつく所やで。」

「ああ・・・そうでしたね、すいません」

「じゃあ、一緒に向こうまで行こうか」

そう言って、青髪ピアスは御堂に後ろに付いてくるよう指示する。
御堂は戸惑いながらも、青髪ピアスの後ろを追っていく。

（どうする・・・？このままじゃ、チャンスを失う・・・）

御堂は後ろを歩きながら、青髪ピアスを注意深く観察した。幸い、警戒はしていないようだ・・・

そして、御堂はゆっくりと、ポケットに手を入れる。

（やるしかない・・・。）

そして、御堂はポケットから、小型のサバイバルナイフを取り出した。

それを、思いっきり青髪ピアスに向かって突き出す。

青髪ピアスは、全く気づかない。

「なあ、御堂。お前って、」

青髪は何を思ったのか、御堂に話しかけた。

そして、後ろの御堂の方を振り返った瞬間、

サバイバルナイフが青髪ピアスが
振り返った事によって、空を切り裂き、青髪の胸の横を通過する。

「なっ」

青髪ピアスより、驚いたのは御堂の方だ。

一方の青髪ピアスも、驚きで頭が混乱するが、一気に体から体温が抜けていくのが分かる。

『殺される』

そう、悟った青髪ピアスは、咄嗟に御堂から距離を取る。

「み、御堂！？いきなり何をッ！？」

一方の御堂は、下を向きながら、顔に手を当てた。そこから、不気味な笑い声が漏れている

「ふふふ」

御堂は、何もかもがおかしくなった。今までの信頼も実績も、全てを吹き飛ばすかのような咆哮を、学園都市に響かせた。

[illegible]

「!？」

「さすがは、青髪ピアス！！。悪運のつえー奴だ！！」

直後、御堂が軽く手を振った。

次の瞬間、青髪ピアスに向けて、光線が放たれた。

「光ツ！？」

気づいたら最後、学園都市第6位の青髪ピアスでさえ、光の速度には反応できず、体に光の光線を浴びる。

貫通はしなかったが、ハンマーで体を殴られたような鈍い激痛と共に、青髪の体が宙を舞う。

背中に地面を付けた瞬間、肺が潰されたかのように無理矢理酸素が吐き出され、視界が二重になる。

(くっ……このままじゃ、やら……れる……)

御堂の方も、容赦なく青髪ピアスに再び光の光線を浴びせてくるだろう、次にこのような感覚を味わえば、どうなるかは一目瞭然である。

「はぁ……つまんね。この程度でやられるとは……伊達にシステムスキャン能力検査をサボってはいないね」

そう言っ、御堂は青髪にトドメを刺すよう、再び手を振るった。

一方の青髪ピアスは、何かに願うように一つ大きく息を吐き、そして、

瞬間、青髪ピアスはポケットに手をつ込む。

そこから、取り出したものは……、

光の能力者

御堂の発生させた光の光線は、青髪ピアスの体を貫く。

同時に、青髪ピアスの方からも爆発的な閃光が発した。両者の攻撃は、激突し、御堂の発生させた光線が中心から四方へ分散させられていく。

そして、青髪ピアスの発生させた攻撃が、御堂の耳元を通過した。飛行機でも通過したんじゃないかという程の爆音と、風が御堂の髪を揺らす。

「くっ……」

御堂は眉間にシワを寄せて悔しがった表情を見せた。

（反応……出来なかった……だど？）

御堂は、ゆっくりと青髪ピアスを見た。彼は、両手に何かを持っている。

銀に輝く装甲と、その先から白い煙が上に向かって流れている。

「『DesartEagle Next』か!」
デザートイーグル
ネックス

青髪ピアスは、『デザートイーグルネックス』と呼ばれる2丁の銃を持つ。

御堂は、予告もなく再び光の光線を青髪に放つ。

だが、青髪ピアスはその光線に銃口を向け、迷わず引き金を引く。

今度は、光に対応出来る速度で、

銃口から、火が噴射する。そこから、放たれた弾丸が、御堂の放った光線を再び中心から引き裂く。

また光線をはじかれた御堂は、唇を噛む。

「くそっ！、そうかよ……くく……所詮は自分ではなく、他の力を借りるのかよ。」

「ああ……確かに使ってる。せけエと思ってもらって構わない」

だがな、と青髪ピアスは付け加える。

「自分の能力に自信も持てねえ奴が、他人に告げ口する資格はねえぞ」

そうして、青髪ピアスから、関西弁が消えてゆく……

「かつての、『超電磁砲^{レールガン}』は、銃ごと吹き飛ばしたぞ」

「そうかよ」

御堂は、笑みを漏らした。

そして、自分を光の速度で飛ばし、光の剣をそのまま振るう。
青髪ピアスもしっかりと対応した、光の剣を銃で受け止める。

御堂と、青髪ピアスが再び睨み合った。

「なら、証明してもらおうか。その手で、その力で」

激戦

御堂は光の光線を連続で射出する。

それに対応した青髪ピアスが、正確に2丁の銃で打ち抜く。

その攻防が、一体どれぐらい続いただろう・・・。

精神が続く限り無制限に光を放てる御堂に対し、弾数に制限のある青髪ピアスは随分と不利なのだ一目瞭然である。しかし、片方の銃で応戦しながら素早く片手だけでリロードする彼に隙などないだろう

そして、均衡は破られる。

大量に発せられる汗が御堂の目に入り、彼は一瞬視界を失う。その隙を見逃さなかった青髪ピアスは、銃で御堂の足元のコンクリートを撃ち、飛び散る破片と衝撃だけで宙を舞った。

地面に強く背中を打ち付けた御堂は咳き込んだ。そして、再び戦闘態勢に入るべく、立ち上がろうとしたときに、御堂の額に何か突きつけられた。

青髪ピアスの銃である。

「くっ……」

御堂はその場で硬直し、青髪ピアスを睨みつける。

「何と思ってもらっても構わない。御堂、お前は何故俺を狙う？」

「ふっ……決着もついてないのに、何故そんな事を言う必要がある？」

「決着なら着いた、だか」

青髪ピアスが言う前に、御堂が間を入れる。それは、声では無く、笑い声で、

「ふふふ……だとしたら、随分お前は愉快的な奴だな」

「何？」

「確かに俺は、複数の依頼人の依頼を受けてお前を倒しに来た。だがなあ、そんな多数の依頼の中でお前を目的とするのは『俺の私情』でしかねえんだよ」

「な・・・・・・・・に・・・・・・・・？」

青髪ピアスが、言葉を失う。

「時間稼ぎは果たしたぜ。

ほうら、それは誰だと思う？複数の依頼人が同一人物に同時に依頼をするような有名人はア？」

青髪ピアスには、思い当たる。

その人物が。

そして、御堂に背を向け、走り出そうとする。だが、途端に激痛が全身を走り、痛さの余り口から血が流れ出る。

それは、御堂との対決の時に負った傷だ。その傷は、深い。今まで気がつかなかったのが不思議なぐらいに。

それでもどうにか片足を引きずりながら、青髪ピアスは、壁にもたれながら必死に歩き出す。

そして、出ない声を必死に振り絞り、かすれた叫び声を荒らげる

「アリ．．．ス．．．！」

青髪ピアスが下宿しているパン屋に着くのに一体どれぐらいの間が経っただろうか．．．？

2階にある玄関へ差し掛かった時に、既に嫌な予感はしていた。

玄関のドアが破壊されている。

焦る気持ちを必死に抑えながら、どうにか足を運び、ドアまでたどり着く。

「アリスッ！！」

自分の部屋に向かって、精一杯に青髪ピアスは叫んだ。

だが、アリスは応答せず、代わりに部屋の床には争った後のような傷跡と、少量の血痕が残っていた

それを見た青髪ピアスは、両膝からガクツと地面に崩れ落ちた。

「クソツ・・・間に・・・合わない・・・かった・・・」

余りの突然さに涙も出ない青髪ピアスの頭に、ゆっくりと、そして鮮明に、あの時の映像がフラッシュバックする。

アリスと過ごした、あの時の思い出が。

『あお』色の過去（前書き）

過去と現在の変わり目には、|||||を使用しています。

どちらかといと、この過去編より、それが終わった後の動きの方が重要かもしれません。

もしよければ、最後まで、ご覧ください

『あお』色の過去

青髪ピアスの頭を駆け巡ったのは、たった一人の少女と生きた、日常だった。

時は、1ヶ月前へ戻る。

[illegible]

アリスは、いつものように家事に勤しんだ。

朝食を食へ終え、そのまま二人の洗濯物に取り掛かる。今日は日曜日で、洗濯物が終わったら後は昼食の仕度まで自由時間があつた。

「ねえ、あお。どうしたの？朝からずっとそこで……？」

アリスは、ベランダからずっと風に当たっている青髪ピアスに声をかけた。

「
・
・
・
・
・
んあ？
・
・
・
・
ああ
・
・
・
」

「本当にどうしたの？　なんか元気ないんじゃない？」

いつも朝から青髪ピースに圧倒されるアリスだったが、今日はテンションが低すぎる青髪ピースに逆に圧倒されている程だ。

それからまた風を浴び続ける青髪ピースに心配しつつも、そのままそっとしておく事にした。そして再び洗濯物に取り掛かうとした時、青髪ピースは口を開いた。

「な、なあ・・・アリス。」

「うん？どうしたの？」

青髪ピースは苦笑いにも似た、わざと笑みを作っているようなぎこちない笑みを浮かべながら外を指差し、

「ちょっと・・・買い物、行こうか」

正直、青髪ピースからそんな言葉が出るとは思ってもいなかった。

「なんかあおの方から誘ってくれるなんて新鮮だねー」

青髪ピアスの後ろを付いていきながらそう言った。対する青髪ピアスの方は、何かを考えているように寡黙状態で前を歩く。

でも、アリスは気にしなかった。

二人はしばらく歩き、第7学区のセブンスミストへやってきていた。

なにやら最近、爆破事件がここで起きたらしく、3階の窓にはまだビニールシートが掛けられていて、未だに復旧作業が続けていた。でも、中のほとんどの店は普通通りに営業していて、青髪達が買い物をする分には大した障害にはならなかった。

青髪ピアスは適当な女物の服屋を探し、そこに入っていく。

そして、「これがいいな」と自分の趣味で服を見つけるや否や、

「アリス。服買ってあげるから、スリーサイズ教えて」

「なっ、あ、ああ、あ、ああ!？」

アリスの顔が、一気に真っ赤に染まる。それと青髪ピアスが盛大に笑い出すのはほぼ同時だった。

「ははは!冗談、冗談やって!最近服無いつて言ってたやん、買っ

てあげるから、自分で好きな選んでええで」

「えっ？ホントにいいの？」

「いいから、いいから」

ポン、と青髪ピアスはアリスの背中を押した。青髪ピアスの本来の性格に惑わされつつも、内心ではほっとしていた。

元の青髪ピアスに戻ってくれた。アリスの心配は全て、解消された。

青髪ピアスはいつの間にかいつものペースに戻っていた。

ゲームセンターのクレーンゲームで青髪ピアスは無双していたのだ。

ポンポンと激ムズに設定されたゆるゆるのクレーンをいとも簡単にクリアして景品を根こそぎ取っていく。

聞いた話によれば、100円以上の景品を取りすぎてその店のクレーンゲームは1日1回とまで宣告された程の達人らしい・・・

「なはは、たいした事できへんボクに取ってみれば、これぐらいし

「か取り柄は無いんですよ」

「そんな事なんかないよ！あおにはまだまだ私の知らない魅力がたくわ、」

アリスは途中で言うのを止めた。そして、その方を指差し

「ねえ、今度はあつちやる、ね！」

「ええええええええええ！？よりによって一番難しい『横穴式ゲーム』！？！しかもクレーンじゃねーやん！」

「いいから、いいから！」

アリスは青髪ピアスの腕を掴んでゲーム機の前までやってくる。それを見た瞬間、青髪ピアスは息を飲む。

（お、思ったより・・・ムズそうやん、コレ・・・でも、普通に買ったら2万、3万ぐらいする景品がズラリ・・・ほ、欲しいイイイイイ！）

そして、青髪ピアスは1000円玉を入れてしまった。

そして、さつきより真剣な眼差しでゲームに挑む青髪。隣で見て
いるアリスまでもが真剣な眼差しになってしまう。

(よし・・・縦、完璧やつ！つぎ横！)

横に全ての神経を集中させて、挑む青髪ピアス。そして、全ては完璧に出来た。

（よっしゃ！これで、賞品はボ）

思わずガッツポーズまで取ってしまうかと思ったほど青髪ピアスは勝利に満ち溢れた顔をした。だが次の瞬間、完璧に行ったハズが、少しだけずれていたらしく、全ては無駄となった

「んあああああああッ！ムズ！何コレ！？」

「あははっ！さすがのあおにも難しかったかな、」

「い、や！まだや！」

青髪ピアスの目は血走り、連続でコインを入れる。

「よしゃあああ！どんとかかってこいやあ！！」

その後、何回コインを入れたのかは言うまでもない・・・

「いや〜結局当たんなかったね〜」

アリスがセブンスミストの屋上でオレンジ色に染まった夕日を見ながら伸びをして、そう話した。

一方の青髪ピアスは負けばかりで肩を落としたまま、小さくため息をついた。

ふと横を見ると、綺麗な夕日が地平線に差し掛かった所だった。

それに何故か感動した青髪ピアスは、柵に両手を乗つけて夕日を眺める

「いや〜・・・こんな高層ビルだらけの学園都市でも、こんな綺麗な夕日が見れる物なんやな〜」

「そうだね、案外私も久しぶりかも」

ちょうど風が出てきた。

心地よい風が、青髪を静かに揺らす。

「そや、アリス嬢に渡さなきゃいけへん物があつたんや」

「え、何何？」

興味深そうに青髪ピアスの顔を覗き込む。青髪ピアスは顔に笑みを浮かべて、

「それは、秘密。ほら、目閉じて」

青髪ピアスの言うとおりに、アリスは微笑みながら目を閉じた。外で、青髪ピアスが慎重に手を伸ばしてるのが分かる。

「ほな、ええで。目開けて」

そして、青髪ピアスは、アリスの首元を指さした。

「しし、今日一日付き合ってたお礼や。受け取って」

アリスは自分の首元を見ると、そこには、夕日の光を受けてオレンジ色に染まる、綺麗なネックレスがあった。

「わあ、綺麗」

そのネックレスを手に取り、それを傾けてみる。

するとネックレスは夕日の光を受けてまるで自ら発光しているように傾ける度に光る。

「こちらこそありがとう、」あお」

今日で、何回この言葉を口にしたのだろう……

そして、もう一回、その言葉を使う。

綺麗に染まった『あお』色の髪を持つ人間に向けて、

「実はね、私からも、『あお』にプレゼントがあるんです」

「なんや、そんなに気遣わなくていいのに」

「いいいいの、ねえ、『あお』。私からのプレゼントはね……」

II

II

青髪ピアスの目から、大粒の涙が落ちる。

に、涙はおさまらない。

「くそ……クソ……くそ……」

(な．．．．．んで．．．．．いつも、いつも．．．．．)

自分の耳に手を伸ばす。

そして、青髪ピアスの名前の象徴でもある、

『ピアス』を耳からゆつくりと、外した。

元々、自分の能力を封じ込めるための誓いとして付けていたピアスだ。

その行為がどのような意味を成すのか、一目瞭然である。

青髪ピアスは、10年にも及ぶ『枷^{かせ}』を、外したのだ。

その時、突然、青髪ピアスの玄関から足音が響き、大声が鳴り響く。

「青髪!!」

見れば、そこには、顔中に汗を浮かべ、息を大きく吐いている土御門がいた。

ピアスを外したのと、土御門がきたのは、ほぼ同時の出来事だった。

「お、おい青髪。お、落ち着いて聞け……。今日未明、ロシアから学園都市へ一通の文章が届いた。その内容は……。『宣戦布告』」

土御門に背を向けて反応の無い青髪ピアスに、土御門は大声を浴びせる

「戦争が始まっちまったんだよ、青髪
イイイイイイイイイイイイイイ
イイ！！！！！！」

土御門が渾身の叫びを青髪ピアスにぶつけると、
ようやく、その、
重たい口がゆっくりと開いた。

そして出た言葉は、たった、一言だけ。

「もう、驚かないよ。」

この日、学園都市から、3人の主人公が消えた。

なんの手掛かりも残さず、突如、姿を消したのだ。

ロシアから届いた文章。それを受理した日から、『第3次世界大戦』は始まっていたのだ。

神を威嚇する者たち

長身に細身の男は、スラックスのポケットに両手を突っ込みながら、廊下をコツコツと音を立たせながら歩く。

下水道かと思うほど、薄暗く小汚い細い道をゆっくりと進んでいく。

ようやく、目的の場所が見えた。

長身の男は、ゆっくりとドアノブに触れ、その扉を開ける。ギギ・
・・・という錆びた音の後に、薄暗い電球の光が男を叩く。

そこには、入ってきた男を含め、4人の人間が居た。

「遅かったな」

一番、右端でソファに座った男がそう呟いた。

「まあ、俺も色々立て込んでんだ。」

長身の男の言い訳を聴きながら、質問した張本人は、顔に笑みを
含めて、鼻で笑った。

長身の男は目の前にある椅子に座って、

「みんな、よく集まってくれたな。礼を言つよ」

男は、続ける。

「当然、俺はみんなの事を知っているが、お前らの中には知らん面子もいるだろう……まずは、自己紹介からと行くか」

長身の男は、頬杖をつきながら、横でバワードスーツ駆動鎧を着込んで完全武装している人間を見る。

中の人間は、少しため息を付く。

「できるだけ、正体は伏せたかったんだがな……ま、ここは仕方がないだろう……。潮岸、それが俺の名だ。知っている者も多いが、学園統括理事会の一人。担当している分野は『軍事』だ」

バトンを受け取り、横の金髪の女子を潮岸は見た。

次の瞬間、女は、今まで開かなかった口をようやく開いた。

「食峰……操祈」

学園都市三大学園の一つ、常盤台中学校に所属し、あの第3位超^レ電磁砲とも、対等に渡り合える第5位は、そのまま話を続けた。

「今のが、本当の名前ですけど……まあ、呼び方は『心理掌握^{メンタルアウト}』
でいいですわ」

そんな事を面倒臭そうに食峰は言つと、横目で隣の同じく金髪の男を見た。

男は比較的優しそうな口調で、こう言い放った。

「俺は、垣根、帝督」

そう言った瞬間、隣の食峰がビクリと反応した。

（垣根・・・帝督！？、まさか、奴は既に死んだハズじゃ・・・！
？）

冷静をどうにか保ちながら、食峰は蔑んだ目で垣根を眺める。

「あら、これはご機嫌麗しゅう、第2位。まさかアナタの様な人間がまだこの世に這いつくばっているとは、」

「おうおう、言ってくれるね常盤台のお嬢さん。派閥だか何だかに身を寄せてないと心配で『裏』を歩くのも平常心でいられないのは何処の誰かな？」

垣根が笑ったように口に笑みを含みながらそう言うと、早速食峰の右手が動いた。

スカートのポケットから簡易ナイフを取り出し、それを垣根にスツと横から投げつける。

一直線に垣根を貫く軌道を描くナイフ。だが、そのナイフは垣根に衝突し、

すり抜けたのだ。

「!」

「止めとけ。これは『ホログラム』だ。俺は第1位のクソ野郎に倒されて、脳味噌だけの状態になった。そして、科学都市の技術を使って俺の体を作り出せば、後は俺の天然の脳味噌を付け足すだけで元の俺の完成……って訳だ」

「くっ」

「止めとけ。」

今度は、垣根でも潮岸でも無く、長身の謎の男からだった。

男は一言で、その場を牽制する。

「そういえば、この場の人間はほとんどが名の知れた人間。そう考えてみれば、見たことがないのはアナタだけよ」

「……俺はフレイ。みんなも分かっている通り、この俺が今回のリーダーを務める。」

フレイと呼ばれる長身の男はそう言った。

そのフレイの言葉に不満を持ったのか、今度はバワードスーツ駆動鎧を着た潮岸が口を開いた

「フレイ？ますます聞かん名だな。それにここは学園都市。そんな無名の奴に全体の指揮権を渡せる程甘くは」

「分からないのか？」

潮岸の言葉が途中でフレイに遮られた。そして、フレイはギロリと鋭い眼光で潮岸を睨む。

それだけで、潮岸が恐れをなし、地面に尻餅を付いた。

「取るに足らん事だな。学園都市つてのは、そんな無名か有名ななんてチンケな事で矛先を間違える程、馬鹿な奴らの集まり。だったって事かよ」

「くっ・・・」

「もういいか？早く計画の説明をしたいんだ」

それを聞いた潮岸が、無言で渋々ながら立ち上がる。

「よいいな。．．．ここに集まってもらったのは他でも無い．．
・ここに集まった人間は、少なからず学園都市に不満を持った人間
が集まっているハズだ。」

「学園都市統括理事会の一人、潮岸。」

「学園都市常盤台中学最大派閥『ローズマリー薔薇色の傭兵』所属、食峰操祈」

「学園都市暗部組織、スクール所属、垣根帝督」

「そして、無所属の、俺」

フレイの言葉は続いた。

「色々なチームから集まってきた俺らだが、今回限りは全てのサー
クルを無くし、俺たちの名を、神を威嚇する者たち、『カムイ神威』とす
る。」

「我々は第3次世界大戦を誘発し、世界各国の中心点として学園都市及び他外国に攻撃を仕掛ける」

「学園都市第4位、麦野沈利、国外出。同じく第1位、第3位も国外出と見られており、手掛かりは一切無い。そして、第2位、第5位は、たった今我ら『神威』の一員となった」

「残るは第6位、第7位のみ。だが、第6位は今だ姿を見せておらず、行方不明扱いとなっている」

「よって残るは第7位、削板軍覇を速やかに行動不能にし、学園都市の勢力を徹底的に削ぎ落とす」

「そして、第3段階目。これにたどり着くとき、我らの目的は達せられるだろう・・・」

では、行こうか。とフレイが立ち上がり、扉を開け、薄暗い道を歩き始める。

その後を、食峰、垣根、潮岸という順番で付いていく。

「我々、『神威』の目的はただ一つ。」

歩きながら、そう言い、フレイが口に笑みを含んだ。

フレイ、及び『神威』の目的は、

「学園都市を、終わらせる」

この日、三人の主人公が学園都市から姿を消した。

そして、同時刻。その3人を追った、または同伴した、3人の少

女達も同じく姿を消した。

もう既に、戦いは始まっている。

世界規模の騒乱の中心点となる学園都市に新たな戦いが生まれる。

そんな3人のヒーローが不在の中、取り残された人間たちはどんな道を歩み、どんな希望を見出すのか？

ここに3人の知らなかった物語が、始まる。

宣戦開幕

遂に第3次世界大戦が幕を開けた。

学園都市中の学校は臨時休校、店はシャッターを完全に閉じ、地下は閉鎖状態。これだけを見れば、ここ数日間の間にどれだけの惨劇があつたのかは一目瞭然である。

だが、そんな過疎のような状況と間逆の状況が、学園都市中を包んでいた。

人だ。

悲鳴を荒らげながら学園都市を逃げ惑う人々で、逆に耳を塞ぎたくなるほどだ。

そんな人たちを鎮静させようとして出勤してきた警備員アンチスキルでさえ、この状況に対処するようなマニュアルは残念ながら存在しない。

学園都市製のアサルトライフルを両手に持ちながら、警備員アンチスキルの装備を纏った人間、黄泉川愛穂もまた、アサルトライフルを持つ手を一層強めながら、顔に汗を流していた。

学園都市に届く攻撃は、全て学園都市上空で迎撃しているハズだ。
なのに、

「なんで、学園都市に攻撃が・・・!?」

次々と降り注ぐ飛来物を、黄泉川はアサルトライフルで応戦する
事もしないまま、呆然と地上に降り注ぐ攻撃を眺めている事しか出
来なかった。

その時、黄泉川の隣に、突然ツインテールの少女が空間を通り越
して目の前に瞬間移動する。黄泉川はすかさず声を張り上げた。

「待つじゃんよ、白井！お前の担当区域は隣の学区のハズだぞ！仕
事をすっぽかして何処へ行くじゃん!？」

黄泉川の言葉に、白井は見向きもせずに、

「お姉さまが、姿を消しましたの」

「何！？御坂が！？」

「時は既に第3次世界大戦。考えられるのは、誘拐か、はたまた自分から姿を消したか・・・どちらにしても、お姉さまの安否が気になるますの」

次の瞬間、白井は黄泉川の視界から消えた。

「待て！白井！」

黄泉川の咆哮にも応答せず、白井は姿を消した。

最後に、舌打ちをして、再び黄泉川も戦線に戻る。

この男もまた、学び舎の園を走り抜けていた。

もう既に此処も戦火が飛び交っている。学園都市が迎撃しているハズの攻撃が地上に降り注いでいるのだ。建物は燃え上がり、煙が空を舞いながらオレンジの空を作り上げる。

男は逃げ惑う人々を避けながら、とある方向へ足を進めた。

「クソ！なんちゅー荒れ様だ・・・」

騒ぎを鎮めようと警備員や風紀委員が動いているが、まるで意味を成さない・・・それ以上に、一般市民の行動が、逆に治安維持機関を飲み込んでいく。

その時、学び舎の園の、一角が燃え上がった。

そして、焼けた木の破片が、雨となって地上に降り注ぐ。ただ、それだけではない。

その下には、まだ幼い子供がいる。

「マズ、い！！」

男はすかさず走り出した。距離は約10m程。だが、木の破片は既に子供の直ぐ上までやってきていた。

「間に、合わなっ・・・！」

そして、木は、降り注いだ。

男は両手で顔を覆った。だが、子供の声は一向に聞こえてこない。気になった男は、両手をどけて、前を見る。

そこには、子供も覆うように背中では木の破片を受け止めている少女がいた。服装は常盤台中学の制服。

少女は、ゆつくりと子供を見て、

「だ、大丈夫・・・？」

「うん・・・だ、大丈夫」

少女は額に汗を浮かべて、笑みを浮かべ、

「なら、良かった・・・」

は目を疑った。それ以上に、この少女の事は知っている。

「霧溪！」

男はそう呼んだ。一方の霧溪と呼ばれる少女は驚いた様に目をまん丸にして男の方を見て、

「きよ、恭介！？ど、どうしたの！？」

名前では分からないかもしれないが、青髪ピアスの同級生、神夜恭介である。

「アホ、お前を迎えに来たに決まってる……それに、大丈夫か？」

先ほどの出来事で、霧溪の制服は所々破け、背中からは血が制服に滲んでいた。

「くっ……」

神夜も辛そうに少女を起き上がらせる。

「クソ……本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫だから……心配しないで、恭介……」

「待ってる……必ず、助けてやるから……」

第3次世界大戦に、この男も加わる。

無能力者緊急招集令

「何・・・？無能力者召集令？」

青い髪を揺らしながら、青髪ピスは眉をひそめた。隣で早歩きの青髪に付いてくる土御門は携帯を開きながら冷静な口調で事情を説明する。

「ああ、この戦争・・・無能力者は学園都市外に全員避難する事が上層部の司令で決まったんだぜよ。この攻撃が止んだ一瞬について、無能力者を外部へ避難させる。」

「大丈夫なん？無能力者つつたって、ハンパじゃねー数なんやで」

「ふん、俺が誇らしげに言える訳じゃねーんだが、学園都市の技術力をナメンなって奴だぜい」

土御門が言ったとおり、この謎の飛来物攻撃が止んだ隙について、学園都市は今ある輸送航空機をフル稼働させてる。よって、オレンジ色の真昼の空に黒い点が空を飛び交っている。

御陰で、耳が航空機の轟音でイカレそーや・・・と青髪ピスは汗を額に浮かべる

「んで、どうすん？お前だって能力を使えるが、レベル的には無能力者やる？」

「うつせー張り倒すぞ。そういうお前だって、能力が飛びぬけてるとは聞いたことなんだがな」

青髪ピアスはいつもの調子で笑った。

こんな戦場のど真ん中で、建物が炎上し、崩れていく中で、

「ふん、いつもの土御門らしい、ひどい口調やな！」

青髪ピアスの語尾が強調された。瞬間、土御門と青髪ピアスはそれぞれ左右に飛ぶ。

次の瞬間、オレンジに光る光線が、二人の居た場所を焼き尽くす。

「大丈夫か？青髪！」

「問題ない！大丈夫や！」

そう言って、青髪ピアスはいつもの慣れている手つきで2丁の銃を取り出した。土御門も、拳銃のある懷に手を差しのべる。

そして、不意打ちを仕掛けた男がちょうど地面に着地した。その人物を見るなり、二人は戦闘態勢を解除する。青髪ピアスは銃を肩で担ぐ。

「おーおーおー。なんやなんや？学園都市の第2位はこの戦争で国籍を『ロシア』に変えちゃったってクチかいな？」

「ちっ・・・外したか・・・」

地面に着地した男、垣根帝督は、舌打ちをした。

「あれれ？第2位って第1位にブチ殺されたハズじゃ・・・？ま、どーでもいいんだけど」

こんな状況下で、いつものペースを保っているのは逆に土御門と青髪ピアスの方だった。

「ム力ついた」

それだけ。

垣根帝督の、額からブチリという鈍い音が響いた。垣根は、その鈍い音を感じながら、彼は、持てる力を開放する。

閃光が、二人の視界を奪った。

ようやく辺の風景が見えるようになったのに、一体どれだけの時間がかかったのだろうか？

「な、なんだ・・・あれ・・・？」

土御門は、目を疑った。

あれは、本当に人間なのか？

まるで天使のような、6枚の翼が垣根の背中から姿を現していた。

「ヤベエな・・・さすがは第2位って所か」

土御門は、額に汗を浮かべた。

次の瞬間、6枚の翼を使って地面を滑るように移動する垣根と二人が、刃を交える。

「ハア・・・ハア・・・」

土御門は、顔中に汗を浮かべながら、学園都市には珍しい林の中を疾走していた。

「ヤベエ、なんだあの力!？」

いつもの土御門らしく無い、焦りのある表情で、出口の見えない木々の間をかき分ける。

その時、土御門の隣の木が突然爆発し、木の破片を受けながら爆風で土御門は吹き飛ばされた。

足をやられた。

「ぐ、あああああああああああああああああッ
ッ!」

ちょうど弁慶の泣き所に当たる部分に木の破片が突き刺さっており、彼は地面にうずくまる。そうしている間にも、攻撃を放った垣根は土御門の前までやってきた。

「くっ……」

「哀れな末路だ。散々俺をコケにしといて、お前は『あの青い髪』

の奴に頼っているばかりか？」

「た、頼る！？何の事だ？」

次の瞬間、鼓膜を突き破る程の大爆音が辺で響いた。それと同時に、垣根は翼を使って空中に逃げ込む。

「土御門！！」

声に誘われ、横を見た。すると、そこには先ほどまで姿の見えなかった青髪ピアスが両手に銃を持ちながら、こちらに向かって走ってくるのが分かる。

青髪は走りながら手を差し伸べた。土御門は必死の力を振り絞って青髪の手を掴む。

「おわっ！？」

無理矢理。という言葉が正解だろうか？

傷を追っているにも関係無くその場で無理矢理起き上がらせて、そのまま牽制用に銃を垣根に向け、撃つ。そして再び土御門の手を握りながら走り出した。

痛みなど、考えている時間がもったいない。

「こつちだ！」

垣根の攻撃をつまく避けながら、青髪ピアスは林の外まで出ることに成功した。

幸いな事に、第7学区の招集の場所として指定されていた建物は、直ぐ目の前だ。学園都市の外へ無能力者を輸送する何十というヘリも、もう既に建物に着陸していて、乗り込みは完了している。

土御門と青髪ピアスのクラスメイトの人間も何人か居た。

次の瞬間、林を丸ごと焼き尽くして、その中から6枚の翼を生やす化け物も姿を空に現した。

その姿を、第7学区の無能力者達は目にする。

「行け！このままだとヘリごと焼き尽くされるぞ！！」

青髪ピアスの言葉にビクリと震え上がった操縦士は、仲間の操縦士と無線を取り合い、安全を確認して、それぞれ空へと飛び交っていく。

あとは土御門を待つだけとなった一機も、土御門が乗り込む寸前で地面から浮いた。

へりに飛び込み、そのまま振り返ってへりから上半身を乗り出し、下に向かって手を伸ばした。

もう既に、青髪ピアスの身長では、手を伸ばさないと届かない程にまでへりは高度を上げていた。

「掴まれ！！青髪！」

もう少し手を伸ばせばつかめるのに、青髪ピアスはそうしなかった。

何故か、土御門に優しく微笑みかけて、

何か言葉を放った。だが、土御門はへりの駆動音でそれを聞き取る事は出来なかった。だが、唇の動きで、何を言っているのか、大体は想像できた。

まだ、やるべき事はある。

そして、土御門の手では、届かぬ程、高度を上げ、へりは進路を変える。

土御門は、そのまま、姿の小さくなる青髪ピアスの姿を見ている事しか出来なかった。

へりの機体を思いっきり拳で叩く。土御門の咆哮が、学園都市の上空で響きわたった。

垣根が動いた。

へりを丸ごと焼き払うために、翼を大きく開く。

そこから、2本の光線が、へリに向けて、翼から発射される。

次の瞬間、2回の爆音が響きわたり、垣根の放った光線が中心から引き裂かれていく。

「お前の相手は、俺だろうが」

2丁の銃口から煙を噴き出しながら、青髪ピアスが垣根の前に立ち塞がる。

ピアスは、もう外した。

彼を取り巻く鎖は、既に外れている。

（もう、失う物は・・・何も無い・・・）

第2位と、第6位が、激突する。

第2位VS第6位

神夜は、背中に少女を乗せながら、裏の路地を疾走していた。

出血量からして、あと10分つて所だろうか・・・とにかく、早めに臨時設営の救急テントまで運ばなければ、

「恭介・・・まだ、大丈夫・・・だから・・・」

「アホ、何も話すな血出るぞ」

もう既に、意識が朦朧としているのか、霧溪の口調は途切れ途切れになっていた。

「放っておいても・・・良かったのに・・・なんで、そんなお人好し・・・なの」

「何言つてんだ、10年も一緒に居た仲じゃねーか」

神夜が、笑みを交えて、そう言った瞬間、

突如、天空から現れた飛来物が、神夜達の横に着弾し、土を巻き上げながら爆風を放つ。

形も大きさも小規模だったとはいえ、その威力だけで二人を軽く吹き飛ばした。

神夜は霧溪と離れた場所で、土の地面に横向きで激突した。

幸い、土だったため、意識は飛ばなかったが……

「霧……溪……？」

ゆっくりと、体を起き上がらせる。火災と煙でオレンジに染まった空を眺めながら、

「クソ……何だ……、今の……？」

（先程から学園都市に届く謎の飛来物、確か学園都市は上空で迎撃してるハズなのだが……）

こんな事を考えていても答えなど当然の如く浮かび上がってこない。

（それより、まず霧溪の事探さねーと……背中が傷が悪化してたらマズイ……）

そう思い、霧溪搜索へと乗り出そうとした瞬間、

神夜の足に、何かが当たった様な気がした。

先ほどの飛来で土埃が舞っていたため、余り周りが見えなかったのだ。神夜は目を凝らすと、

「何だよ……コレ……」

そこに、あつたのは、確かに、人間。

何十という人間が、地面に倒れている。

その時、神夜を見つけた霧溪が、おぼつかない足取りで神夜の方へ近寄る。

「きょう……す、け……?」

「見んじゃねえ」

神夜は霧溪の目を塞いだ。

それほどまでに、残酷で受け入れがたい光景でもあった。でも、次の瞬間、その残酷さを踏みにじるように、一人の人間が神夜の前までやってくる。

「これで分かっただろ、戦争は犠牲無しには成立しない。戦争とはある意味、犠牲をつくるために起きた事件・・・とでも解釈できる」

神夜の目の前に、防護服のようなパワードスーツ駆動鎧を着た人間が、そう話した

「・・・誰だ」

「潮岸、とでも言っておこうか。学園都市統括理事会の一人、担当する分野は、『軍事』だ」

(統括理事会・・・とはいえ、味方とは言えなさそうだな・・・)

そう悟った神夜は、霧溪に、小さく耳打ちする。

「・・・ここを直ぐ抜けた所に、臨時設営の救急テントがある。俺が後ろ守ってやるから、辛いかもしんねーが、一人で走って先に向かってくれ」

「ホント、ごめんね・・・必ず、帰ってきてね」

「気にすんな、必ず帰ってくるから、俺が帰る頃には、その心配症直してくれな」

ぼん、と霧溪の背中を軽く押した。霧溪が走り出したのを感じた

神夜は、潮岸と霧溪のちょうど中間辺に立ち塞がる

「いいのか、この戦争に置いて、女子を一人にさせるのは余りにも酷だぞ」

「お前らの・・・やった方が、ずっと酷だろーが」

「いや、違う」

潮岸は、バワードスーツ駆動鎧越しにでも伝わってくる、邪悪な笑みを浮かべて、

「こっついう意味だ」

潮岸は、右手を挙げた。

次の瞬間、圧倒的と言える程の数の武装集団が、武器を持って、神夜の周りを囲む。

「!?!」

霧溪も、当然の如く、拘束される。彼女は戦闘向きの能力では無いので、こういう数で圧倒される場面ではまるで齒が立たない。

「霧溪！！」

「おっと、動くなよ。ターゲット 標的はお前だからな、神夜恭介。お前が一步も動きさえしなけりゃあ、あの女の子は開放も考えてやる」

神夜は、潮岸を睨んだ。

彼自身、そのまま潮岸の警告に従う事にした。だが、何かのほずみで、足が少し動いた瞬間、

本来の目的であるハズの神夜恭介では無く、霧溪に銃口を向けた人間が、そのまま何の迷いもなく引き金を引いた。

銃声音が響きわたる。そして、銃弾は、霧溪の腕をかすった。ただそれだけで、霧溪の腕から血がにじみ出る。

「て、メエ！！」

「おっと、誰もお前に撃つとは言っていない……お前に課せられる使命は、このまま動いてあの少女が犠牲になるか、それともこのまま俺に拘束されて死ぬか」

もう、この時既に、潮岸の話は神夜の耳には1ミリも入ってなかった。

激昂した神夜が、歯を折りそうな程噛み締めた。

「ダメ！恭介、『アレ』を使っちゃ！」

霧溪が、力一杯に叫んだ。もうそれすらも、神夜の耳には入らない。

直後、嵐のような風が、潮岸を装甲ごと吹き飛ばした。

「ぐあっ！」

潮岸は、決死の力で頭をフル回転させる。

（ど、どどどという事だ！？神夜恭介。資料によればレベル0、最低レベルの高校でも頭が悪いランキング1、2位を争う程のクズ中のクズじゃないのか！？）

そんな神夜を、覆っているが、

（何だよ……あの、『黒い炎』……は）

それはまるで、幻想的な色だった。

真っ黒に染あがる漆黒の炎が、神夜を取り巻く。

その時、潮岸の仲間の方から、叫び声が聞こえた。

「潮岸さん！ご命令を！！」

「殺せ！その女を骨も残らんように殺し尽くせ！！」

次の瞬間、動いたのは、神夜。

彼から放たれた漆黒の炎が、霧溪の周りの武装集団を吹き飛ばす。
霧溪を上手くぐり抜けるように

そして、武器、仲間すらも失った潮岸の前に、神夜が立ち塞がる。

「ひ、い・・・ど、どうとでもしろよ、化け物オオオ!!」

「っ・・・」

神夜は唇を噛んだ。拳を強く握りしめる。

「化け物はお前の方だろ。人を平気で殺す、悪魔が」

神夜は、拳に炎を宿した。

真っ黒な異質の炎は、そのまま潮岸を焼き切る。そう思われたが、

霧溪の手が、神夜の片方の手を掴んだ。

「霧溪・・・」

そして、神夜は目で潮岸を牽制した。

潮岸は、渋々ながら、その場を去っていく。

「ごめんな、怖い思いさせちゃって」

「うっん、こっついのは・・・なんていうか、慣れてるから・・・ね」

「・・・っ、行くか。早くしねーと」

そう言って、もう一度霧溪を背中に乗せた

あの学園都市最強の能力者、一方通行アクレレータとも対等に戦い、一時は優勢ももつれ込む事にも成功した第2位、垣根帝督は、額に汗を浮かべていた。

（冗談じゃねえ・・・なんであんなバケモンが学園都市にいやがるんだ！？）

翼で林をかき分け、速度にして270kmという速度で林を突き進む。今の彼には『人間』という概念は存在しないので、髪が揺れる程度で移動に何の影響も無い。

でも、

瞬間、垣根の横の視界に変化があった。

垣根は6枚の翼で今持てる全ベクトルを注ぎ込み、最大の威力の翼を振るった。

だが、その翼は止められる。

青い髪の少年によって。

「くっ・・・」

青髪ピアスはそのまま拳を垣根の顔面に叩きつけた。

瞬間、周りの林が風圧でなぎ倒され、垣根の体は100m、200mという単位で吹き飛んでいく。地面に体を激突した尚も、砂埃を荒らげ、地面を削っていく。

「よっぽど、おめーの方がバケモンじゃねーか」

青髪ピアスが垣根の心を見透かしたようにそう言い放った。そうこうしてる間にも、400m先で垣根が瞬時に立ち上がり、翼を使って暴風を生み出す。

その暴風によって周りの木々は根ごと吹き飛ばされ、何十mという長さの木と一緒に青髪ピアスに襲いかかる。

だが、

垣根は一瞬^{まばたき}瞬きをした瞬間、光線が暴風を中心から引き裂いた。

「ちっ、」

垣根は舌打ちする。攻撃は全て防がれた。

（後は様子を見ながら未元物質で攻撃を混じえながら時間を稼がねーと）

その出来事、約1秒半。

それだけの時間なのに、垣根の視界に何かが映った。その影は、垣根の背後に移動する。

わずかに視界に捉えたのは、『青い髪』

400mという距離を一瞬で詰め寄る化け物に、垣根は自信の能力を使い、この世には存在しない物質を使い、剣と言うには程遠い黒い鋭利な棒を、青髪ピアスに横から叩きつける。

その鋭利な棒は、青髪ピアスの体に触れた瞬間、

凄まじい轟音を荒らげ、粉々に粉碎した。

「なっ、これは鋼鉄・・・いや、ダイヤモンドすらも切り裂く最強の刃のハズ。なんで、テメエは、切り裂かれねえ・・・？」

「決まってるだろ。俺の能力だ」

一瞬、垣根の脳裏に何かがよぎった。

（あの距離間の移動、空間移動テレポーター・・・いや、あの拳の威力・・・それに今の攻撃の弾きようといい・・・まさか、奴もベクトルを！？）

これまで考えて、やがて垣根の脳には、一つの能力が浮かび上がった。

（いや、何処かの闇の噂で聞いた事がある・・・今や姿を消し、幻の存在となった学園都市第6位は、どんな攻撃も受け止め、攻撃にしても威力は最高峰を誇る・・・まさか、奴の能力は、『パーフェクトアーマー肉体強化』最終進化系、『完全装甲』か！？）

だが、時すでに遅し。

青髪ピアスに顔面を殴られ、地面に叩きつけられた。

威力だけで、クレーターのような小さな穴を作る。

だが、垣根はまだ生きていた。

「俺は・・・この程度では、死なない・・・」

「なら、何度でも殴ってやるさ」

青髪ピアスは垣根をもう一度殴ろうと、胸元をつかんだ瞬間、

あろうことが、青髪ピアスの手が垣根の体にめり込んだのだ。

「！！！」

「ハハハッ！！俺はホログラム！もう俺の体では無い！」

直後、太陽の光が具現化した。あの一方通行にも放った、最強の
アクレラレータ
殺人光線を、

「お前には一切の攻撃が通じ無い・・・なら、その盾を無くせばいいのさ！お前の盾を腐敗させる、最強の光線だな！！！」

まさに、絶体絶命とはこの事。

次の瞬間、青髪ピアスに光線が襲いかかった。

戦時中の日本

「くたばれ、パーフェクトアーマー完全装甲」

垣根の声と同時に、天空より6本の黄金の光線が青髪と垣根を通過する起動を描く。

青髪ピアスの最強の装甲をもつてすれば、そのままでも十分な盾となるのだが、如何せん相手は垣根帝督。彼の持つ新物質をまともに食らえば、どうなるか分かったもんじゃない。

青髪ピアスは腕に力を込め、垣根の胸にめり込んでいる腕を引っ張ろうとした。だが、

抜けない……。

「ハハハ、そういうモンなんだよ！そうじゃねーと意味がねーだろウがアアア！！」

（やはり、この力しかないのか！？）

青髪ピアスは第6位の力を爆発させた。

めり込んでいる腕を最終段階まで肉体強化する。そして、『^{パーフェク}完全装甲』となつた腕に全力を注ぎ込む。

「お、オオオおおおおおおおおおおッ！！！」

「！！！」

次の瞬間、垣根の胸が弾け飛んだ。
と、同時に垣根の放った光線が青髪ピアスに届いた。

爆音が辺に響き、土埃が舞う。

青髪ピアスが傷だらけの顔をなんとか動かし、起き上がる

もう既にこの場に、垣根は居ない。

（ちっ……今は、逃げるためのフェイクだったか……）

青髪ピアスはそこらへんに落ちている自分の銃を拾い、空を見た

この黄金の空の中、かすかだが、ロシアの方向に、何か巨大な塊が天空に昇っているのがわかる。

「なんだ・・・あれは・・・？」

青髪ピアスは眉をひそめた。だが、今は戦争中。何が起きててもそれほど驚きはしない

（ちきしょう・・・早くアリスちゃんを探さにやいけへんのに、また余計な事で時間を潰してしまった・・・）

そして、青髪ピアスは再び動き出した。

神夜は、霧溪を背中に乗せ、目的地まで走っていた。

霧溪の額には汗が大量に浮かんでおり、もう意識を失ってもおかしくない状態だった。

「お、おい霧溪、大丈夫か！？」

「だ、だいじょうぶ・・・だよ。」

明らかに大丈夫な状態ではなかった。神夜の服を掴む手も段々と緩んでいくのがわかった。

「ちきしょう・・・た、頼む。お願いだから、助かってくれ、頼む」

もう自分で何を言っているのか全然わからなかった。ただ無我夢中で走る。

そんな時、銃声音が響きわたり、神夜の直ぐ足元の地面に命中する。その威力ではじけ飛ぶ石や砂利の破片が、神夜の足首に突き刺さった。

「ぐあっツ!!」

体勢がよろけた。そのまま霧溪を放り出してしまいそうになったが、なんとか踏みとどまる。

だが、悪夢はそれだけではなかった。

前を見ていなかった一瞬の隙を突かれ、神夜の周りに一斉に武装した人間が神夜を囲む。

最悪だ。

神夜は常に人に命を狙われる存在だった。

でも、今は霧溪も居る。しかももう危ない状況なのに、本当に、最悪だ。

一斉に神夜に銃口を突き付ける。それはつまり霧溪にも銃口を突きつけられている事になるが、360度全方位を囲まれていて、どうしようもない。

もう既に勝ち誇ったとばかりに、とある一人が口を開いた。

「終わりだ。化け物。確保も人質もねえ、テメーにはここで死んでもらうだけだ」

「今はそれどころじゃねえんだよ！頼む、もう霧溪があぶねえ！！頼むからどいてくれ！」

「誰に口聞いてんだ、ああ？テメエみてーなバケモンと人間が対等に話出来るとでも思ったか？」

「お願いだよ！霧溪にはまだ死んで欲しくねえんだ！」

「黙れ」

「ちくしょう、頼むよ・・・お願いだから・・・まだ、失いたくねえんだ・・・まだ、霧溪の笑顔が見てえんだよ・・・今だけでいいから、そこを、どいてくれよ・・・」

目尻にうつすらと涙を浮かべた。
最後はもう涙声になる。

だが、神夜の強い願いすらも、たった一言でねじ伏せられた。

「うぜえ」

拳を握った一人が、神夜の顔を思いつきり殴りつけた。

鈍い音と共に、神夜は地面に倒れ、霧溪は地面に叩きつけられる。

「きょう、すけ・・・！」

霧溪は、ふらつく体をなんとか動かし、神夜の方を見た。

ちょうどそこでは、神夜に最後のトドメを指すため、殴った男が拳銃を神夜に突きつけた。

男は、引き金に手を掛ける。

霧溪は、何も考えず、走り出した。

顔面を思いっきり殴られ、神夜は後ろの地面に転がった。

霧溪を持つ手も力が抜け、霧溪を放してしまった。

神夜が前を向いた時には、既に男が銃口をこちらに向けていた。

全身に、寒気が走る

「残念だったな、バケモンみてーなお前を助けるために、犠牲になるだろう可愛い彼女と共に、死んでいけ」

神夜は、目をつぶった。

次の瞬間、容赦なく銃声音が響きわたった。

だが、一向に神夜から生氣が抜き取られない……

おそろおそろ、彼は目を開けた。そこには……、

少女が、少年の前に立ちふさがり、銃弾の身代わりになった。

少年の目の前で、悪夢の血がはじけ飛ぶ。目が大きく開いた。呼吸も、思考も、動きも、全てが止まった。

殺戮

神夜の目の前で、血飛沫が飛んだ。

「……………っ、っあ」

なんて声を出したら良いのか分からない程、神夜の頭は真っ白になった。そして、倒れる霧溪を、本能的な動きで神夜は受け止めた。ここで、ようやく神夜の脳の処理が追いついた。今何が目の前で起こっているのか、神夜は思い知る

「お、おい……………霧溪」

「……………ごめん、ね……………私の能力じゃあ、貴方を……………助ける、事は……………」

霧溪の言葉を最後まで聞き取る事が出来なかった。これは、霧溪が力尽きたのではない。

莫大な感情が、神夜の頭をパンクさせていた。

霧溪の言葉を理解する脳などもう他の感情で埋め合わされている。

「くっ、」

強烈な激痛が、神夜の目の辺で起こった。

この時、彼の目に『黒いモヤ』が掛かった事は、神夜自信では理解出来ない。

同時に、銃を再びリロードした男が、神夜に再び銃口を向けた。

「俺の命令はお前を殺すこと。たとえ銃弾が届かなかろうがはじかれようが、なんどでも俺はお前に銃口を向ける」

死んだな。

そう周りで男の味方として来た人たちはそう思った。

そして、容赦なく銃声音が響きわたる。

神夜と霧溪の人生はここで終わった。

誰もが、そう、思っていた。

「な、なんだよ………?」

震えた口調で、そう言った。

「なんだよ、聞いてねえぞ!!なんで、なんで、こんなレベル0のゴミクズに………黒い、炎?」

神夜のまわりに、黒い炎が彼をまとう。

そのとき、彼が片手を開いた。そこから落ちてきたのは、粉々に潰れた銃弾が地面に落ちた

「て、テメエ………人間………か?」

神夜は答えない。次の瞬間、

神夜は、前を向いた。その彼の眼の色が、白と黒が逆転していた。

その目を見た瞬間、

体のまわりから黒い炎が噴き出す

「ぐ、ぐあああああああああああああああああああああああ
ああああっッ！！」

黒い炎に一瞬にして飲み込まれた人間たちをみて、銃口を神夜に
向ける男は顔中に汗を噴き出した

「おい、なんか・・・言えよ」

次の瞬間、神夜が片手で男の首を持ちあげる。

「がはッ、！」

物凄い力が男の首にかかり、首が砕けそうになる。

銃など、苦しみで手から軽々しく落ちた。

これが、神夜の味わった・・・苦しみというヤツか・・・

男は神夜の目を見た。

普通の人間と目の色が真逆になっている。どう考えても、人間じゃない。

「なんか・・・言えよ」

神夜は、口を開かない

「なんか言えつつつてんだろ！人間墜ちした化け物がアアアアアア
！！！！」

次の瞬間、神夜は、ようやく重たい口を開いた。

「・・・・・・・・qhtw」

直後、神夜の手に、黒い炎が集まる。

そして、その手を男に殴りつけるように、前に出した。

黒い炎の柱が、何kmという単位で雲を突き抜けた。

誰もが、その炎を目にする。

一直線に雲まで伸びる黒い炎を、

同時刻、

「何ですの……あれは……？」

白井は、傷だらけになった顔を上げて空を見た。炎というより、『黒い光』といった方がいいかもしれない

同時刻、

「なんだ．．．あの、光は．．．？」

グループではなく、個人的な理由としてこの戦争に参加していた
海原光貴は、そう独り言を言い放った。

神夜は、重たい頭を上げた。

「くそ．．．俺は、一体．．．．．？」

目の色も元に戻り、思考も安定している。

（また、使っちゃった．．．抑える、そう誓ったのに．．．!!）

彼は地面を叩いた。

そこで、神夜は、霧溪のことを、思い出した

「霧、溪！」

神夜の5m先に、霧溪は地面に倒れていた。あわてて駆け寄り、頭を膝の上にさせる。

衰弱しきっているが、意識はある

「恭・・・介？」

「ちくしょう・・・なんで、いつもいつも、お前が・・・？」

下を向く神夜の腕を、彼女は掴んだ

「大丈夫・・・これは、私が勝手にした事・・・だから・・・」

霧溪が、そう言った瞬間、

ガサガサ、と神夜の後ろの草が音を立てた。

神夜は霧溪を後ろにして振り向いた。そこにいたのは、意外な人物であつた……

「あ、青髪……………」

「お、おい……………」

青髪は、続ける。

「なんだよ……………今の、黒い……………炎は……………」

神夜の呼吸が、止まった。

決断

「な、なんや・・・その、黒い炎は？」

神夜の頭の中が真っ白になる。

何もかもが終わった・・・と悟った神夜だったが、ここで霧溪の状態に気づいた青髪が慌てて駆け寄る

「彼女・・・何があつたん！？」

「・・・俺を庇って右腕に銃弾を食らってる」

ぐったりとしている霧溪を見て、青髪は彼女の首の脈に触れた。

「・・・脈は弱いがまだある。彼女、腕に銃弾を食らってどんぐらいの時間が経つんや？」

「ほんの、3分程前だ。でも、それより前に背中にケガを負ってる、野営の診療所まで運ぼうとしている時に・・・こんな事に・・・」

チクシヨウ・・・と神夜は悔しそうに下を向いた。

「俺は、たった一人の人間を助ける事も出来ないなんて……情けねえ……なんて情けねえんだ……」

青髪ピアスは、霧溪の脇腹の辺に手を置いて能力を操作した。

「関係の無い神経に刺激を俺の能力で与えといた……一瞬だが、痛みもやわらぐ……」

そして、下を向く神夜に、青髪は少し微笑んで肩に手を置いた。

「気にせんでいい……俺もおんなじモンや。」

最後に気にしなくていい……と神夜の肩を叩き、

「お前もあれほどの黒い炎を使えるのと同じように、学園都市最高クラスの階級を持っていたても、出来ねえ事は山ほどあるんや」

「……お前、まさか……」

「ずっと隠してすまなかったカミヤン・・・俺は学園都市レベル5の第6位なんや・・・」

正直、神夜に事実を告げるのは怖かった。

こんなちっぽけな事実だけで、友達が消えるとずっと思い込んできた青髪ピアスにとって、今の発現は、どんな勇気が必要だったのかは一目瞭然である。

ふつと軽い笑みを取った神夜の行動は、青髪の考えていた事と真逆の反応だった

「お前の事は、なんでも知っているつもりだった・・・でも、お互いここまで知らない事づくしだったとはな・・・なんだか、逆に笑えてくるな・・・」

「・・・嫌悪しないんか？」

「俺もお前と同じような境遇にいる身だ。お前の能力を隠したいっていう気持ちは嫌でも分かるし、実際こうして俺もお前やみんなに能力がある事を伏せて生きてきてる・・・なんつーか、お互い様ってやつだな」

「カミヤん・・・」

「・・・それより、どうしたらいい・・・？霧溪は？」

「今は一時的に鎮痛してあるが、また痛みが襲ってくる。病院に連れていく時間は無さそうや・・・」

「じゃあ、どうすれば・・・？」

「霧溪ちゃんは、俺が責任を持って治す。レベル5は、数年前に一
クレ
ラ
レ
ー
タ
齊に集まって医療技術の講習を受けたことがあるんや・・・ま、一
方通行や麦野なんかの猛者は当然の如く集まらんやつたが、」

「具体的には・・・どうやって・・・？」

「ん、カミヤんには悪いが、今はこれしかないんや・・・」

青髪は次の瞬間、驚愕の言葉を口にした

「
・
・
・
・
腕を、
開く
」

青髪の旧友

「俺が、腕を開く」

神夜との間に少しの間静寂が生まれた。そして、神夜は低く答えた。

「……大丈夫なのか？」

「少なくとも講習は受けた。実践はやったことがないんやがな……」

そう言つて、青髪は自分のポケットから小さな円筒形の箱を取り出す。

「今、学園都市第7位を呼んではる。それに、麻酔はこの空襲で底をついてる……。全ての意思決定は……。霧溪ちゃん、君なんやで」

青髪ピアスと神夜は隣で横になつてゐる霧溪を見た。彼女は、顔中に汗を浮かべながら、静かにこう答えた。

「お願い……。します」

「……意識のある状態で腕を開くには相当の激痛が伴うんや、それでも」

「いい……んです、恭介には色々と迷惑を掛けたし……麻醉を調達するにはまた恭介に負担がかかる……私には、わかるんです……今の恭介が痛みになんと耐えている事ぐらい……」

「!!」

青髪ピアスは神夜を見た。

多少傷は追っているものの、いつも通りの表情でいる。けど、それは外見だけで、彼は下手をすれば霧溪以上の痛みを負っているかもしれない……

「大丈夫なのか……カミヤン？」

「気にすんな……」

神夜は言葉を紡ぐ。

「ずっと、ずっと……俺は霧溪を守っている気だった……俺と関わっているだけで、霧溪には命の危険だってある。銃口を向けら

れた事なんざこの両手の指で数え切れねえ程ある。でも、そんな危険な状況からずっと、霧溪を守る事に成功した……。なんて気だった……。でも、実際は違った。こんな大戦が起きて、そこから中から俺を殺しに来た連中に対し、俺は私情で霧溪を傷つける事しか出来なかった……。情けねえ、」

そして、神夜は青髪達に背を向けた

「だから、俺の事は気にすんな……。青髪、後は頼んだ……。」

そう言って、神夜は歩きだした。

「待て！お前の体の状況じゃあこれ以上の戦闘は無理や！それに、この大戦でお前の危険度は一般市民の俺にまで届いてる程だぞ！何百、いや……。何千という軍勢がお前を狙っているかもしれないやで！」

青髪ピアスの怒号にも勝る声など、神夜には届きはしなかった。

たった一言で、青髪ピアスは打ち碎かれる

「気にすんな。『俺たち』は、前に10万もの軍勢を敵に回したこ

ともある。」

そう言って、神夜は再び歩きだした。青髪ピアスは、その人物を、これ以上止める事は、出来なかった・・・

神夜を止める事に失敗した青髪ピアスだったが、いつまでもそれを引きずっている訳にはいかない・・・もうすぐ、学園都市第7位が来る。

青髪ピアスは、ずっとずっと、心に何か引っかかる物を残したまま生きてきた。

それは、とある少女との別れだった。

決して長くはなかった期間だったが、同じ境遇同士少しかは分
り合えた人間だ。

だが、突然、青髪ピアスはその少女から姿を消した。

「もう……3年……か、」

そう言いながら、青髪ピアスは携帯電話を取り出した。

（もうすぐ削板が来る。最後に、これまでの愚行を謝んねえと……
）

青髪ピアスは、携帯の電話帳を開いた。

そして、相手を確認し、通話ボタンを押した。

確かに、そこには、こう書いてあった。

御坂、美琴と……。

再会

「・・・くつ、そ・・・さすがに本場の戦場って所かしら」

御坂は弾き出したコインの弾道を眺めながらそう呟いた。

一直線に雪道を弾き、着弾点で大きく雪が爆発した。超電磁砲レールガンによつて生み出された暴風が雪を巻き込み吹雪のように辺を舞う。

御坂は慣れている仕草のように乱れた衣服を軽く直し、顔にかか
る髪を整えた。

次の瞬間、御坂の携帯電話が唸りを荒らげる

「うおっ！？け、携帯！？」

御坂は慌ててポケットを探り、携帯を取り出した。折りたたみ式の携帯を開き、送り先を確認する。

直後、御坂の体に寒気が走った。

画面の中心には、『青髪ピアス』という文字が入っていた。数年前に、彼が勝手に登録した名前だ。それっきり、連絡が途絶えたのを理由に、御坂は面倒なので名前をそのままにしてあったのだ。

（こんな時に、まさか・・・）

御坂は通話ボタンを押し、恐る恐る耳に当てる。

「もしもし・・・？」

『・・・良かった、通じた』

確かに、青髪ピアスの声だ。未だに覚えている

「ちょっと、アンタ・・・今まで何処に居たのよ!？」

『悪い・・・ずっと、学園都市にいたんや』

御坂は眉を潜めた。

「アンタ・・・その喋り方・・・」

『ああ・・・御坂嬢と合わなくなって、ボクは名前も封じたし、喋り方も変えた。第6位って事を伏せておきたかったんや、でも、ありがとうな御坂嬢。御陰で今の今も人間を特定されずに済んでる』

「・・・っ！さすがに私だって『約束』ぐらい守るわよ。」

『意外とやりそうだからな』

「うつさい！」

『フフ、でもさすがに大覇星祭の時はびっくりしたな。だって突然御坂嬢がボクの学校に観戦しにくるんやもん、でも、気付かなかったみたいやね。ま、どんだけカミヤんの事が好きなのかってのが伺えるんやけど』

「ああ、もう！そこは触れなくてよろしい！！」

『まあまあそうお嬢様が声を張り上げないで。今日は用件があって電話させてもらったんや』

「用件？」

『そ。とある少女の治療をしたいんやけどね、腕に銃弾を食らってる。常盤台の制服着てるから、もしかしてっと思っただ次第なんやけど』

「も、もしかして黒子！？」

『いんや、霧深くて子らしい。』

「・・・」

『どうしたんや・・・？御坂嬢？』

「私の、クラスメイトよ・・・」

『マジですかい！？』

「あんな物静かで突発的な行動をしない子が、どうして・・・」
「？」

御坂の声に悲しみが混ざる。

『どうも、カミヤ・・・いや、神夜の事を庇って身代わりに銃弾を食らったらしい・・・』

「・・・あの、バカ！なんでそんな事・・・」

『どうやら、知っているみたいやね。こっちも『第1次学園都市異能力戦争』とか言われているらしい・・・』

「知ってる。携帯のワンセグで見たわ」

『全く、『第3次世界大戦』の戦場か『第1次学園都市異能力戦争』の戦場・・・本当にどっちの方が安全かも分からないような程までに滅茶苦茶になってる・・・』

「黒子は・・・？初春さん、佐天さん・・・その他の人たちはど

うなつて!？」

『ウチの学校には警備員アンチスキルの先生がいるんや。その先生が言つてたよ、レベル0は無事全員避難完了、初春は・・・戦場ジャッジメントで風紀委員として頑張つてる・・・白井・・・!』

「ちょっと待つてよ、まさか・・・!」

『現在、行方不明中になつてる・・・』

電話の向こうで声が途絶えた。しばらくして・・・ようやく声が聞こえた

「わかった・・・私もやる事を終えたら、直ぐにそっちに向かう」

『助かる、今学園都市にレベル5は二人しかいない・・・御坂嬢がそう言ってくれて助かったよ』

「必ず、霧溪を治して」

『わかつてる。必ず、治すからな』

そう言つて、青髪ピアスは通話を切つた。今は、御坂よりも、目の前の方を優先しなければならぬ

（大丈夫だ。必ず助けてみせる）

学園都市第7学区は、火の海に包まれていた。

建物が燃え、次々と崩れる。

そんな塵気楼すら見えそうな程炎で空気が揺れる中、一人の男が
ゆがんだ空気の中をただ一人突っ立っていた。

黒髪にチエーンの付いたパーカー、ズボンはどこかの高校のスラ
ックスを着込み、パーカーの裏から伸びたイヤホンが男の右耳に伸
びていた。見た目180cmぐらいの長身の男は鋭い目つきで当た
りを眺める。

と、同時に銃声音が当たりに響いた。

銃口から放たれた銃弾は一直線に長身の男へと向かった。だがそ

の銃弾は男をそのまま通り抜けた。

まるで、男が空気だったかのように、無残に銃弾が突き抜けた。

「さすがは第1次学園都市異能力戦争を勃発させた男、素直には倒させてもらえんか・・・」

前方30mの地点に、その声を発した男はいた。長身の男は静かに男を睨みつける。

「何の用だ？」

「おっと、それはこちらのセリフのようだフレイ。学園都市側のお前が、わざわざ『神威』とかいう馬鹿げた組織を引き連れて何を企む？」

「愚問だな。いい加減革命を起こさねば、この街は滅びる。その目的の達成のためには、俺一人の力では足りない・・・そのための組織だ。俺はその一員として・・・いや、俺にはそんな組織のメンバーは務まらん。俺が務めたのは、この戦争の引き金・・・それだけさ」

「クールだねえ、フレイ。クールすぎて寒気がするぐれえだよ」

男は口に笑みを含みながら、銃を取り出そうと、腰に手を伸ばそうとした瞬間、

いや、正確には取り出そうと指を動かすために運動神経に信号を送るために脳が動き出した瞬間、

フレイは、男が確認する間もなく後ろにあった30m程のマンシヨンの屋上へ移動した。

ようやく確認が出来たのは腰に手が伸びて銃に手が触れた瞬間だった

「残念ながら、俺には銃弾を防ぐような力は持っていない」

「何の事？僕はただキミにある計画を伝えようと紙を取り出そうとしたんだけどね」

「・・・・・・・・・・」

「ああ、さっきのは挨拶だよ。戦争の引き金を引いた男の実力はどんな物か知っておきたかったからね」

男は精一杯の笑顔でそう答えた。直後、フレイは30m程の高さから何の迷いもなく飛び降りた。

ポケットに手をつ込んだまま、何の対策もなく、

直後に、男は腰から銃を上に向けた。

「馬鹿がアア！！空中じゃア身動きがとれねえ！ここで地球の塵になれゴミクス！！」

男は引き金を引くため手に力を込め、銃口を落下するフレイに向ける

次の瞬間、フレイは男の目の前まで落下していた。

「なっ・・・！？」

地面まで残り25mもあつたのに、気付けばフレイは目の前まで落下していた。

高度3000mからのスカイダイビングで一瞬で高度1000mまで降りれるか？

高さ100mからのバンジージャンプで一瞬で最終落下地点まで降りれるか？

そんな初歩的な疑問を吹き飛ばすかのようにフレイはそのまま落下しようとする。

そのまま落下し、男と激突する。00000000000000

1秒前に、フレイはわずかに口を開いた。

「んな事だろーと思ったよ」

瞬間、フレイと男を中心に半径300mが吹き飛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7916v/>

とある第六位の青髪ピアス

2011年12月27日19時52分発行